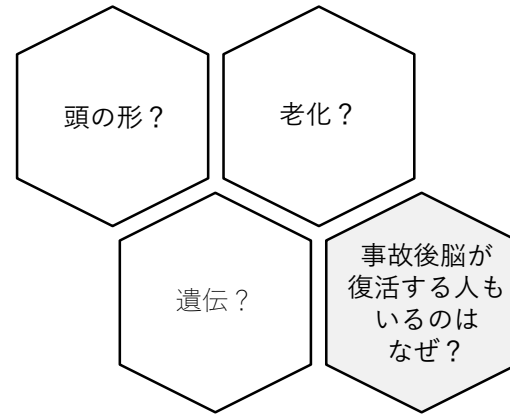
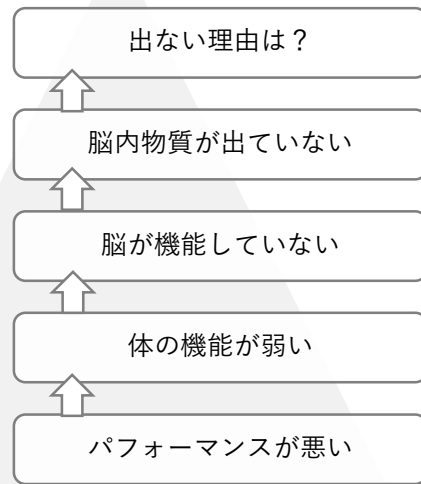


## 2. 症状から追う機能展開・分子栄養学との関係



体と脳を構成するための材料不足が原因

分子栄養学を取り入れた  
人体構成材料補給の概念へ

分子栄養学とは、個々の人間のDNAの働きを分子レベルで考えるという意味であり、「固体差の栄養学」です。私たちがよく知っているカロリーの栄養学とは全く異なります。

兄弟であっても顔や体つき、脳の働きや体質が異なるのはDNAの指令によって出来上がる「たんぱく質の構造」が異なるからです。1つのたんぱく質にはアミノ酸が100個以上、多いものだと1万個以上ものアミノ酸分子がつながっており、この並べ方を変えながら人間の細胞内では10万種類ものたんぱく質を作り出し、必要な場所にそれぞれ届けています。たんぱく質というと、皮膚や筋肉を想像しがちですが、血液やリンパ液も、骨も、皆タンパク質からできています。

たんぱく質は細胞膜の中にも存在しており、このたんぱく質がビタミンやミネラルと化学反応を起こすことによって、ホルモンや、脳内物質を作り出したり受け取ったりしています。光や味、匂い、触覚などの刺激を受け取るレセプターも、不安やうつ、集中力ややる気などといった精神も、すべての生命活動はたんぱく質中心であるといえます。

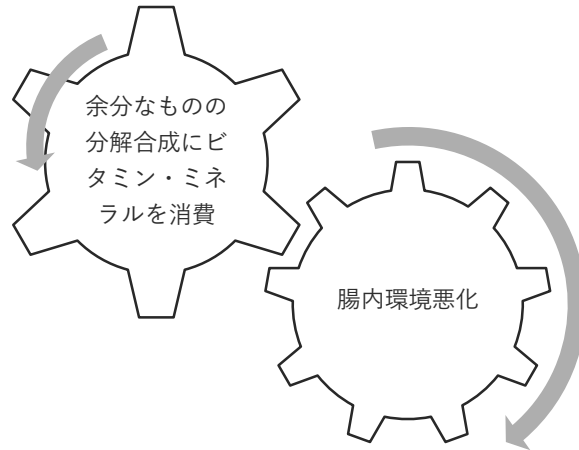
このたんぱく質の分解合成にはビタミンやミネラルが補酵素として必要で、不足するとたんぱく質を作る能力が低くなります。逆に、必要十分に補充してあげれば、たんぱく質のはたらきを助けてあげることができるようになります。

こうした働きは細胞で行われており、細胞の質は細胞膜に存在している脂（リン脂質）の質によって決まります。細胞から核を取り除いても細胞はすぐには死なないが、膜が破壊されると速死滅することが実験で分かっており、健康な細胞膜にはレシチンやDHAなどが必須です。

## 4. 材料不足の原因と症状

材料不足になる理由

1. 栄養に対する根本的誤解
2. 食品添加物
3. 食物不耐・アレルギー
4. 悪玉菌の腸内増殖
5. コンビニ等普及により選好みによる偏り
6. 電磁波・化学物質等の影響による自律神経の乱れ
7. その他



- ・ 抗生物質の多用・・・腸内フローラの乱れ
- ・ 糖類の摂りすぎ・・・カンジダ菌の餌
- ・ リーキーガット・・・カンジダ菌のコロニー形成サイトカイン・細菌・未消化タンパク質が血中へ流出

### 電磁波過敏症の症状

- ・ 消化器の障害
- ・ 睡眠障害
- ・ 集中力の低下
- ・ 皮膚症状（チクチク・灼熱感・発疹など）
- ・ 精神的ストレス（いらいら・抑圧・不安）
- ・ 頭痛、腹痛、筋肉痛
- ・ 疲労
- ・ 平衡感覚異常
- ・ 目の動きの鈍化

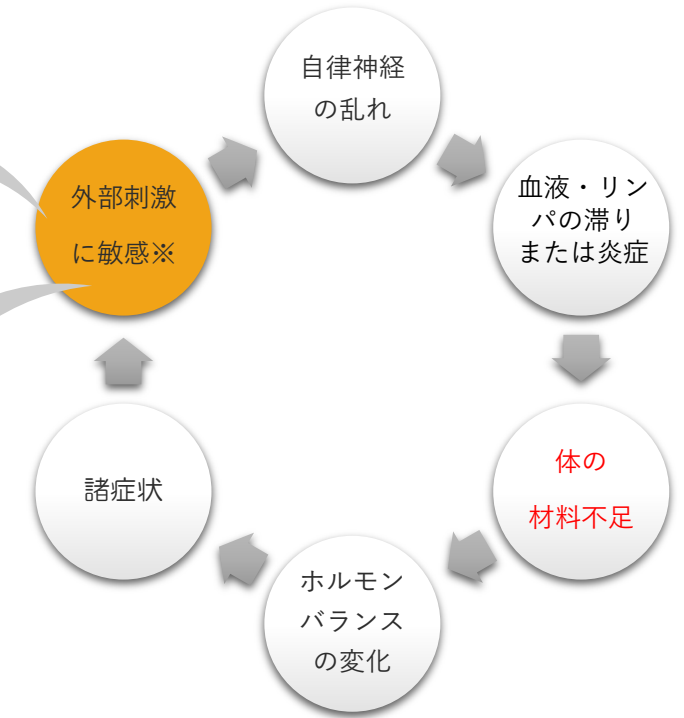


### グルテン過敏症の症状

- ・ 消化器の障害
- ・ 睡眠障害
- ・ 集中力の低下
- ・ 皮膚症状（毛孔性角化症・発疹など）
- ・ 精神的ストレス（いらいら・抑圧・不安）
- ・ 頭痛、腹痛、関節痛
- ・ 疲労
- ・ 平衡感覚異常
- ・ 自己免疫疾患



余分なものの分解合成にビタミン・ミネラルを消費  
腸内環境が悪化



※場や他者の意識などに対し無意識で感じていることも含みます。これについては第3回量子場観察術講座および第8回意識と無意識についての講座でご説明します。